

## コーディネーターとしての事業に対する意見シート

- 事業名：森林資源循環活用フォーラム「夢ある未来の鍵は木」
- コーディネーター氏名・所属：伴 和子 フィール アクト ワークショップ
- ふりかえり会議開催年月日：平成 16 年 6 月 22 日

### 1. 協働のプロセスについて意見

本事業はNPOが行政の窓口をたずね、企画の提案に出向いたことから始まった。フォーラム実施日まで二年度にわたって、6ヶ月という時間をNPOと行政が共有したことになる。比較的柔軟な予算だてが可能だった事で、一年目は事業の広報活動に、二年目はフォーラム当日の会場費や講師謝金に予算を当てるという計画が実行された。年度変わりに担当者の移動があったが、引継ぎはスムーズに行なわれたようだ。実行委員会のメンバーは主となるNPOや行政担当者だけでなく、林業に関わる複数の団体からのメンバーも加わり構成されていたのが、フォーラム当日の参加者人数(180名)にも表れているのではないかと思った。また、担当を離れた行政職員が個人として継続的に関わり、フォーラム当日を向かえたこと、また、ふりかえり会議にも出席されたことには人と人のつながりの構築がうかがわれた。

講演会を協働で企画運営する時、広報・予算・会場確保などは行政が関わることでスムーズに進み、NPOは講演会の内容を通して自己の理念を広めることが可能になるという事は以前から行なわれている。お互いがお互いの長所を認め合って役割分担していたことは確かであるが、今回の事業も協働のプロセスが従来の形にとどまったのが残念に思われた。実行委員会ではNPO側からのさまざまな提案に対して行政側が『それはできる、できない』というやり取りのくり返しをNPOは感じていたようで、両者が対等な立場で意見を出し合い、ねらいや内容を吟味し、共通のゴールに向かって合意形成していくというプロセスを十分に共有したかどうかには疑問が残る。

### 2. 成果についての意見

参加者人数に関しては両者満足している。木質系資源をプラスチックのように成形加工可能な機能性資源に変換し、広く利用する手段を提供した講演内容は「林業に携わっている人々に森林の利用という面で希望を持つ事ができる内容だった」という反応があったようだ。しかし、計画段階からフォーラムのねらいや成果目標の細部にわたる検討が充分になされていなかったようだ。どんなねらいをもって取り

組むかはとても大切である。それが企画運営の方向性を決定するのであるから…。講演会を開催し、多くの人々に参加してもらうのがねらいのすべてだったのか、講演会開催を通して、何がどうなるといいと思っていたのか？

単発の講演会として終るのではなく、参加者とのつながりや講演会の継続性を希望しているNPOが本事業と同じことは自分達だけでは到底できないと考え、行政の力に今後を期待してしまうのはなぜだろうかと考える時、今回参加費を取らなかった事が、今後の講演会の開催を阻んでいるひとつの要因になっていると感じた。『県の事業で参加費をとることは前例が無い』という思い込みが行政にはあったようだが、実際は県の事業で参加費を取ることはあるようだ。たとえ前例がないことでも、双方が必要と考えれば、新しく道を開いていくことも柔軟に検討する姿勢が必要だと感じた。また、アンケートを用意しても回収の準備がなされていなかたり、報告書を作ろうということで協力金を当日お願いするなど、準備の忙しさがすこしもったいない気がした。180名もの参加者とこれからもつながりをもって活動を広げていくことに可能性を感じている。是非、参加者人数という成果を今後活かしてほしいものだ。それはNPOのミッションでもあるのではないだろうか？

### 3. 課題・改善の整理とまとめ

計画段階で「目指すところ」についての話し合いが十分になされていないのが課題である。行政の成果目標は「参加者が未来のよい社会作りに希望がもてること」、NPOのそれは「参加者が未来への希望ある願望を持ちそれが社会全般に伝わっていくこと」となっており、両者とも“参加者が未来に対して希望を持つ”というとても漠然とした成果目標である。それを達成するためにはどんな手立てがあるかを考えた時、講演者の話の内容に負うところが大きい。成果を達成するために、企画者であるNPOと行政が独自で仕掛けられる事にはどんな事があっただろうか？両者ともこのフォーラムと創り上げていく過程で何がどのようになる事を望んでいたのか、木の循環活用を地域の林業とどのように結びつけようと考えていたのかについての具体的な話し合いがなされ、戦略を立てることを試みたら、両者の思いの共有がもっと深いものになったと考える。

### 4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

NPOの熱い思いを行政が受けとめ、講演会開催という形にしたところにNOPと行政

の人間ネットワーキングを感じる。NPOの実行委員会への出席やフォーラム当日のかかわりについては旅費や人件費は出ていないので、団体もしくは個人の持ち出しになっているのだろう。NOPはお金の流れに、行政は企画内容に対等にアイデアを出し合えると、双方の負担が減り、楽しみが増え、新しい発見ができる協働になると思う。

## コーディネーターとしての事業に対する意見シート

- 事業名: 森林支援循環活用フォーラム「夢ある未来の鍵は木」
- コーディネーター氏名・所属: 自給支援ネットワーク 辻本晴美
- ふりかえり会議開催年月日: 平成16年 6月22日

### 1. 協働のプロセスについて意見

雨森真知子さんの私淑されている、船岡正光氏の話をしてできるだけ沢山の方に聞いてもらって、夢ある未来を切開きたいと思われたのが、事業開始のきっかけ。協働の相手を探して、何人もの行政担当者に声をかけられてそうですが、生活環境森林部(当時は、生活環境部)の柳田さんが反応しました。だんだん協働という認識を持っていったところから、中身が成長した→いろいろな人に実行委員になってもらった→十分議論した→大勢の人に共感してもらえたという効果のあるプロセスをたどりました。また、途中で行政側の担当者が変わりましたが、この点についても、スムーズに引き継がれていてよかったなと感じました。協働としては、理想的なプロセスだったと思います。

### 2. 成果についての意見

双方とも、参加人数が予想より上回り、一定の成果があったとの発言であった。また、ほとんどの講演会への参加者の感想が「よかった」ということであり、それを受けて、講演の内容を冊子にして沢山の人に知ってもらおうと事業終了後も努力されている。冊子を作成する原資も参加者からの寄付があり、調達できている。『人間の力はスゴイ』『世の中は良くなるという手ごたえ』という発言あり、今後の展開に確かなものを感じ取られており、これが市民活動の醍醐味かと感じました。県側からの発言で、「民官という区別無で動けた」というのもありました。一番大きな成果ではないでしょうか？

### 3. 課題・改善の整理とまとめ

個人的な熱意が大きな原動力になっている、NPOは個の力が強い、県職の役割は大きなものがある、といった発言がありました。プラスの方向にこれらの力が働いたときにはいいですが、ひとつの組織として動くときに、これらの要因がマイナスになってしまい、独善に傾いてしまう可能性も大きいとおもいます。この人の講演会を開催したいといったときには、個人の熱意が大きくものをいうが、講演の内容で得たことを、実際の行動に乗せようとするときには、沢山の人間のかかわりが必要だからです。せつかく大勢の人に共感してもらえたということですので、それを活用して、「再生可能な資源に科学の力をプラスしてどんな夢ある未来を切り開くことができるのか」実際に多くの方に伝えていかれるよう願っています。

協働がふれば社会話変わるという発言もありました。ルール、マニュアルではなく人が大事な要素だという発言もありました。この人を育てていくのは、“県民”という発言にもうなずかされます。そして事業としては、理想的な展開を見せていると感じましたが、チェックシートに、計画段階において評価方法については、十分検討していなかったという反省点が記載されていました。協働がふえて行けば、一番問題になってくるように思います。この点が、今後事業を継続される時の課題になるかと思えます。

#### 4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

自分を取り巻く環境に危機感を持っているもの一人として、21世紀を夢ある社会に変えていこうとの多様な取組みがここにもあると、うれしく思いましたが、では、実際に自分に何ができるのかということが分かりませんでした(講演を聴きについてないので当然ですが)。物質の流れを分子レベルで認識し云々。むつかしそう。循環共生型、持続可能な社会、地球生態系の基盤をなすシステムを攪乱しない事とパンフレットにありました。そのとおりだと思います。ぜひそういう社会になってほしいと思います。～船岡正光氏の著書「夢ある未来の鍵は木」と記録集を手にいれて読んでみなければ～セルロースは、なかなか土にもどらないけれど、いつかはもどる。土に戻らないものの使用は止めて、土に戻るものを使用するのは大事な事。再生可能な資源の活用を求めて、森の風プロジェクトさんの今後の展開に期待しています！